

仕事が楽しい人 F i l e . 2 6 : 高祖 真樹さん (ジョブコーチ)



◆努力を求めず、工夫を凝らすのがジョブコーチの仕事

今回ご紹介する職業は、ジョブコーチ。

聞き覚えがありそうで、あまり関わりのない職業ではないでしょうか。

ジョブコーチとは、“障害者が一般の職場で働くために、障害者と企業の双方を支援する就労支援の専門職”です。

このような職務定義を読んでも、どのような仕事なのかイメージできませんので、ジョブコーチを務めている高祖さんから、仕事の実際を伺いました。

発達障害のある方が、経理関連の業務をされていたときの事例をもとにして、高祖さんのジョブコーチの仕事振りをご紹介します。

彼は経理データの入力や請求書の発行、そして書類の発送作業を行い、定型文のような類の文章作成の仕事も任されていますが、ときどき、急に黙り込んでしまうことがあります。

難しい単語も使いこなした文章も書けるので、

周囲で仕事をしている同僚は、一般の人と同様に彼を評価してしまい、急に黙り込み作業の手を止めてしまった彼を見ると、

「どうして黙ってしまうの」

「作業に飽きちゃったんじゃないの」

「もう少し、頑張らなきゃダメだよ」

という、指導をしてしまいます。

しかし、彼には、あるときに突然黙り込んでしまう緘黙（かんもく）という症状があり、「サボりたいから」とか「飽きたから」という理由で、作業の手を止めているわけではないのだそうです。

ジョブコーチは、このような障害の特性を理解し、彼にどのように接し、仕事を割り振ればいいのかを、迎え入れた職場の人たちに、対応の仕方の実際を見せながら指導します。受け入れがうまくいかないと、体に発疹が出るような身体症状が現れ出社できなくなり、彼が苦しむだけではなく、職場の人たちにも暗澹たる思いが残ってしまいます。結果として、障害のある方を受け入れる自信を失い、障害者雇用が進まないという悪循環に陥ってしまいかねません。

高祖さんは言います。

「努力してもできるようにならない仕事がある事実を認めることが肝心なのですよ」と。この言葉を最初に耳にしたときには、すんなりと受け入れられませんでした。それは、「汗の量は嘘をつかない」とか、「努力は必ず報われる」という思いで何事にも打ち込むべしとの考えが、固定観念となっていたからでしょう。

しかし、高祖さんから次の言葉を聞いて、目が覚めました。

「努力を求めるのではなく、工夫を凝らす」

判断する業務がうまくできないのなら、判断しなくてもできるような工夫をする。

例えば、業務の流れを全て図解入りの手順書に落とし込む。

そうすれば、彼も落ち着いて仕事に取り組みます。

また、「努力を求めようではなく、工夫を凝らす」を常に意識していれば、緘黙（かんもく）の症状が現れたときに、落ち着くまで待とうという余裕が心に生まれます。

高祖さんからこの話を聞いて、準備もそれほどしていない状態でチームメンバーに、「いいからつべこべ言わずにやりなさい」とまる投げの指示を出したり、依頼内容をわかりやすく説明する手を抜きながら、思った通りにできないと、「なんで、こんなことができないんだ」と叱る身勝手な自分が思い浮かび、反省してしまいました。

#### ◆高祖さんが大切にしているキーワード

「とりあえずやってみよう」

やってみれば、本当に無理かどうかわかる。

だから「やる前に無理と決め付けるのはやめよう」をモットーに行動しています。

#### ◆高祖さんのパワー○○○

「自分で自分に頑張れと励ます」

思考が停止してしまうほど、仕事が行き詰まってしまうことがあります。  
そんな時には「今までも大変なことを乗り越えてきたじゃん」と自分に言い聞かせると、  
「頑張ればなんとかなるよ」という気持ちに切り替わります。

#### ◆高祖さんのコツコツ

毎朝、神棚にお水をお供えして拝むこと。  
「今日も〇〇頑張りますから、何かあれば、助けてください」と  
神頼みするのではなく、努力を誓っています。

#### ◆平堀が感じ取った、高祖さんがジョブコーチになった理由

高祖さんに、どんなときに仕事のやりがいを感じるのか聞いてみました。  
すると、高祖さんは、  
「支援者が仕事をしているときに、“いい顔”をして見せてくれること」と即答しました。  
“いい顔”には、ある仕事をやり遂げた達成感にあふれた顔だけではなく、  
どうしても思い通りにできなくて、悔しがる表情もあるのだそうです。  
例えば、片方の手が不自由なために雑巾を一人では絞れない方の場合に、  
縫った通常の形状の雑巾ではなく、タオルを雑巾代わりに使うことを発想します。  
タオルだったら蛇口に引っ掛けて、片方の手でぐるぐる回せば絞ることができる。  
こんな工夫が実り、雑巾がけができるようになると、仕事を依頼した人から  
「掃除をしてくれて助かりました」  
とのお礼メールが入ります。  
このメールを本人に見せると、ニコッと嬉しそうな表情を見せてくれるそうです。  
高祖さんは、“自分は人の役にたっているのだ”という自己貢献感が、  
その人の活力になるのだと、ジョブコーチの仕事をして痛感しているようです。  
「“人の役に立ちたい”との思いを行動に移すのは、人が生きていく上で生きがいを感じる、  
根源的なものなのだ」と、高祖さんは話に力が入ります。  
それは、高祖さんがジョブコーチの道を選んだきっかけにもなった体験談に、  
込められていました。  
高祖さんが以前勤めていた会社の採用面接に、かなり重度の高い障害者が  
応募してきたときの出来事です。  
このとき高祖さんは、障害者の雇用責任者として、多くの方々を採用し、配属から仕事の  
割り振り、そして定着の支援をしていました。  
そして、高祖さんは障害者雇用の実務にも慣れ、多少の見識も身につけていました。  
ですから、重度の高い応募者を見て、不謹慎ではありますが、  
「障害年金があるので生活はできるはずなのに、なぜ、無理して働こうとするのか」  
との思いが、脳裏をかすめました。

こんな思いを抱きながら、応募理由を尋ねると、

「私は今まで、人からお世話しかしてもらっていません」

「だから、これからは、“人の役にたつこと”をしたいのです」との答えが返ってきました。

これを聞いた高祖さんは言葉を失い、穴があったら入りたいとの思いになり、

その場で、号泣しそうになってしまったそうです。

どこかで障害者だからと線を引いている自分を、なんていう人間なんだと責めたのです。

そしてこれまで、働く目的を「自己実現のため」とわかったように人に言ってきた自分が薄っぺらで、情けないと感じたのです。

まさに、高祖さんがジョブコーチを生涯の職として選んだ瞬間でした。

高祖さんは、「自己実現のため」という教科書に載っているような理由ではなく、

“人の役にたつこと”を仕事に出来る有り難さを応募者から教えられ、天職を見出したのです。

#### ◆高祖さんのプロフィール

職業：ジョブコーチ

所属：社会福祉法人 トポスの会 (<http://www.with-you.me/organization/index.html>)

#### ◆ジョブコーチとは？

(ウィキペディアより転載しました)

**ジョブコーチ** (*job coach*) とは、障害者の就労に当たり、出来ることと出来ないことを事業所に伝達するなど、障害者が円滑に就労できるように、職場内外の支援環境を整える者を指す。一見障害者には見えない発達障害者の就労で多用される。資格は特にないが、福祉に関心のある者が、短期講習で養成される場合が多い。

また、障害者自立支援法による「障害者就労移行支援事業所」に勤務する、雇用先との調整や利用者の指導を行う職員のことをジョブコーチという場合がある。

また、障害者の雇用の促進等に関する法律による「職場適応援助者助成金制度」を利用しジョブコーチとして活動をする際には、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構の行う第1号職場適応援助者養成研修もしくは第2号職場適応援助者養成研修やJC-NET（ジョブコーチネットワーク）や特定非営利活動法人大阪障害者雇用支援ネットワークの行うジョブコーチ（ジョブ・メイト）養成研修（職場適応援助者養成研修）を修了する事が必須となる。

#### ◆ジョブコーチに求められる能力

母性力：あらゆる人を受け入れる、大きな受容力

専門知識：障害についての一定の見識と、実務全般の知識と経験

観察力：仕事の進め方や職場環境の特性を把握する力

伝達力：聞き手の目線にあわせて、物事を伝える力

創意工夫：仕事に取り組めるような道具や方法を考え出す力